

## 県内における新型インフルエンザ患者確認に伴う 外出やイベント開催等の自粛要請について

次の理由により、現時点においては、一律の外出自粛要請やイベント等の開催自粛要請は行わないこととし、「こまめに手洗い・うがいを行う」、「外出の際は、なるべく人混みを避ける」などの感染防止対策を重ねて呼びかける。

なお、ハイリスク者（基礎疾患のある人、妊婦、高齢者や幼児などかかると重症化する恐れのある人）に対しては、特に感染の予防が必要である旨を改めて周知する。

### 【理由】

- 1 国立感染症研究所が公表した神戸市及び大阪府における新型インフルエンザの臨床像（平成21年5月20日、5月21日）の中で、今回の新型インフルエンザは、季節性のインフルエンザと臨床像において類似していること、患者の大半は入院を要する状況ではなかったこと、また、抗インフルエンザウイルス薬投与後、比較的速やかに諸症状が改善したことが明らかにされていること。
- 2 国の「基本的対処方針（平成21年5月22日）」において、「国民生活や経済への影響を最小限に抑えつつ、感染拡大を防ぐとともに、基礎疾患を有する者等を守るという目標を掲げ、対策を講じることが適当であり、外出については、自粛要請を行わない。」とされていること。
- 3 国の「医療の確保、検疫、学校・保育施設等の臨時休業の要請等に関する運用方針（平成21年6月19日改定）」において、「ほとんどの者は軽症のまま回復しているが、一部の基礎疾患を有する者等は重症化することが分かっている。」とされていること。

### ■神戸市における新型インフルエンザの臨床像（暫定報告）（5月20日）抜粋

#### ○患者属性・基礎疾患の有無

- ・患者は43例
- ・年齢の中央値は17歳で殆どが10代後半の若者
- ・基礎疾患について、慢性気管支喘息を挙げた者が6例あった。
- ・糖尿病、心疾患、免疫不全、悪性腫瘍等の背景を持つ者はいなかった。

#### ○入院時の臨床像

- ・約90%に38℃以上の高熱を認めた。
- ・60～80%の頻度で挙げられた症状は倦怠感、熱感、咳、咽頭痛
- ・鼻汁、鼻閉、頭痛は約半数において認められた。
- ・嘔吐や下痢の消化器症状は約10%弱に、結膜炎は7%に認められた。

#### ○入院適応

- ・患者の大半は入院を要する臨床状況ではなかった。
- ・人工喚気を行う対象者はなく、死亡例も発生していない。
- ・現時点までの状況では、季節性のインフルエンザと臨床像において類似しており、全例を入院させる医学的な必要性はないことが示唆される。

【裏面に続く】

■大阪府における新型インフルエンザの臨床像（5月21日）抜粋

- 大阪府茨木市（K 中学・高等学校：64例）及び八尾市（M 小学校：5例）の69例は全て臨床的に入院を要するとは評価されず、抗インフルエンザウイルス薬の投与後比較的速やかに諸症状の改善がみられていた。
- 38℃以上の高熱、咳・咽頭痛・鼻汁・熱感等の急性呼吸器症状は、K 中学・高等学校、M 小学校ともに高率に認められた。
- 全身倦怠感や頭痛は K 中学・高等学校では症状出現率は M 小学校よりも低く、反対に M 小学校の症例では腹部症状は認められなかったが、M 小学校の検討可能例数は少ないため、今後更に同年齢層の症例の追加・検討が必要であると思われる
- 多くは突然の高熱で発症しているが、中には急性呼吸器症状や腹部症状を前駆症状として数日後に高熱を発する例も認められている。これは季節性インフルエンザでも同様の症例を認めることがあり、むしろ様々な病態をとる可能性があることを示しているものと考え